

『ソクラテスの弁明』
『クリトン』 **超**現代語訳

プラトン 原作
新國稔秧 訳
NIKUNI TOSHIO

これならわかる

ソクラテスの言葉

そうだったのかと
納得する喜びが、
この本の魅力です。

奈良大学教授

上野 誠

『ソクラテスの弁明』

『クリトン』 **超**現代語訳

プラトン 原作

新國稔秧 訳

NIKUNI TOSHIO

これならわかる
**ソクラテスの
言葉**



お品書き

はじめに 5

ソクラテスの弁明

- 一 裁かれる日の朝 11
- 一 法廷に響くみごとな言葉 21
- 一 眞実は語られていない 23
- 一 悪意に満ちた、うわさ 26
- 一 神託の謎とき 36
- 一 メレトス答えよ！ 45
- 一 ソクラテスはかく語る 58
- 一 吾輩は蛇である 66
- 一 神霊の声が聞こえる 71
- 一 権力から遠く離れて 73
- 一 いつまでも考えてください 78



- 一 教えたことは一度もない 80
- 一 うその正体を明かそう 82
- 一 裁きは静かに待つべきだ 86
- 一 最初の裁き 89
- 一 ご褒美をください 92
- 一 死刑がきまった 104
- 一 あなた方こそ、裁判員 110
- 一 運命の日に、祭礼が始まった 116
- 一 裁きの終わった夜 119

クリトン

- 一 君と僕の獄中対話『クリトン』 125
- お味はいかがでしたか 162
- おわりに 166
- 参考文献 169

はじめに

2011年3月11日。

大津波が東日本を襲った。そんななか、町舎の防災塔から「はやく、高台へ避難してください」と、自分に死がせまっても、持ち場を離れずに叫び続け多くの命を救い、津波の犠牲になった若い女性の職員がいた。この責任感に満ちた気高い行動は、災害に打ちのめされた人々の心を熱くした。

だが、追い打ちをかけた福島第一原発の重大事故では、「大津波は、想定外」のことだった」と、企業のトップや技術者は責任をのがれる言葉を用意した。

これは大自然の脅威に自分たちが無知だったからか。いや、その可能性はわかっていたにもかかわらず、当面の経済活動を優先して、あえて想定しなかったということだろう。

いつの世にも、地位や権力にしがみつき自己弁護にあけくれる人間がいるかと思うと、自分の命もかえりみず他人のために勇気をふりしぼる人がいる……。

私はふと、遠い昔の「ソクラテス」の顔を思い浮かべた。

みなさんは、この人物を知っているだろうか？

「うん、名前なら知っているけど深くは知らない」。

それならば、ソクラテスの言葉がぎっしり詰まった『ソクラテスの弁明』と『クリトン』をぜひ読んでみてほしい。

この作品では、「おまえの教育が若者を墮落させた」と、濡れ衣を着せられて法廷に引きずり出されたソクラテスが、自分の無罪を皮肉を込め弁明する。けれど、この正義に満ちた言葉も罫には勝てずに死刑が宣告される。そんななか、仲間たちが脱獄をすすめるが、ソクラテスは耳もかさずに、死を樂しむように受け容れる。こんなようすがプラトンの筆で舞台劇を見るように描かれた名作である。

しかし、この本は、現在とはかなりちがう時代背景のため、その表現に馴染めない人も多いのではないかと心配になる。そこで、私は、古い表現を、現代の生きた言葉におき換えて現代風にし、多くのみなさんに読んでもらいたいと考えた。

古典を料理して、今風にリアルな視点で意識すると、当時の社会に横行した悪に、ソクラテスが抱いた怒りが、そのまま、時代や民族、それに国のちがいも超えわれわれの怒りとなる。

たとえば、いくら科学の知識とともに時代が進歩したと誇っても、その反面、人間はどれほど賢くなったのか。自分の立場も忘れ、専門的な知識を悪用した不祥事を聞くたびに、怒りがおさまらない。

だけど、ソクラテスは目くじらをたて怒りまくって暮らしていたわけではない。天下の大浪人のように、相手が政治家だろうが官僚だろうが、権力を恐れずに、どうどくとふるまった。「あなたは、自分が賢いと思っているでしょうが、賢くないと思う人の方が賢いですよ」と、ひやかすように話しては、相手の無知をあげて歩いた。

だが、その顔は、人を食ったような面構えではなく、子どもっぽささえ感じさせる愛

きょうのある顔をして、いつも「ひやかしの精神」を忘れなかった。ひやかされた人物は「バカにするな!」と、怒鳴るもの、やがて自分の無知を思い知らされることになる。

私の勝手な味付けで、古典の本来の味が失われたのでは、と心配でもある。でもとにかく、食事をしながらページをめくる、そんな遊び心で読んで見てほしい。

ソクラテスの人間への熱い思いが、みなさんに届き、そこから「自分はどう生きればいいのか?」。

「日本という国はこれからどうすべきか?」。

などについて考えるヒントが見つかれば幸いである。

平成二十五年春

新國 にいくに
稔映 としお

ソクラテスの弁明

裁かれる日の朝

その日。

ソクラテスの家を朝早くから、プラトンやクリトンなど多くの人が訪れた。人とのつきあいが苦手な、部屋に込もってばかりいる妻のクサンティッペも、さすがにこの日は、子どもたちと来客の前に顔を見せる。

クリトンは彼女を見つけると言った。

「奥さん。今日は、われわれでソクラテスさんを守りますから、心配しないでください。裁判が終われば、みんな、ここにもどります。裁判には、かならず勝てます。無罪ですよ！」

もしも、有罪となっても、われわれの仲間には、裁判の経験者がたくさんいます。だから

ら、どんな場合でも対応する自信があります。死刑など絶対にありえません。

「もしも、死刑の判決がくだされても、あわてることなく、裁判の仕組をうまく利用して死刑を罰金刑に減刑させて、お金を払い終わらせませす。ほら、お金なら、ここにたっぷりありますよ。」

クリトンが財布をまいたわき腹をたたくと、銀貨がチャリチャリ音をたてた。

「あとは、国外追放、こうなっても、大丈夫。ソクラテスさんが、どこの国へ追い出されても、ご家族の生活は、われわれにまかせてください。ご不自由はおかけいたしません。ソクラテスさんのものに行きたいと望まれたら、なんどでもお連れしますから、安心してください。」

このクリトンの力強い言葉に

「そうだ、そうだ」

と、みんなが口をそろえる。

その時、みんなの声にさそわれたように朝食のパンを口のなかで、モグモグさせながら、ソクラテスが姿を見せた。

「おやおや、こんなにたくさんの仲間が、朝早くから、なんの用事かな?」
とソクラテスが子どものようにおどける。

「なんの用事かなんて、のんきなことを言わないでくださいよ。今日は、裁判! だから、裁判所まで、みんなで行こうと来たのです」。

クリトンの答えに、ソクラテスは

「いやー、こんなにおおぜいの仲間と裁判所にのり込むなんて、てれくさいね」

と、団子のような鼻をピクピクさせて笑った。

「みなさん、ところでね。わたしはいましたが、妙な夢を見てしまった。一番鶏いちばんどりの声を聞くと、また眠りに落ちたらしいのだ。夢のなかで、ふと気がつくと、夕暮れどきの渡し場わたにいて、川からは白い綿雲のようなものが湧き出ていた。ふしぎな川だと眺めていたら、突然とつぜん、どこからともなく、伝馬船てんませんがあらわれて『さあさあ、ソクラテスさん。早くおのりください。お懐かしいです』と、聞きおぼえのある船頭の声。驚いてよくみると、な

んと、あのカイレポンだったんだ」。

「そうすると、ソクラテスさんは、今朝、夢の中でカイレポンに会われたのですね」と、クリトンが口をはさんだ。

「そうなのだ。それから、わたしはその船にのせられたのだが、カイレポンがこう言ったのだ。『ソクラテスさん。わたしはこの靈界れいかいに移ってからは船頭となり、この仕事をはじめ、この春で五年目になる。毎日毎日、ソクラテスさんを、おのせできる日を楽しみにしていたのです』」。

「ああ、そうか、あれから五年」。

みんなはソクラテスの大ファンだったカイレポンが死んだ日のことを思いだした。ソクラテスは続ける。

「カイレポンはあの細い腕うでで、腰こしをふりながら上手かに權いをこいで、船を向こう岸へよせ

た。渡し場のすぐそばにくると、あの世の役人らしき男が大声で叫んだ。

『その船をもどせ！ その船の人物は三十日後に、お迎えするから』と。

カイレポーンが『どうしてなのか？』と、聞くと、そこで目が覚めてしまい、君たちが門で騒ぐ声がしたのだよ。

この夢はなにを暗示していると思うかね？ 夕暮れどきは人生の終わりを、白い綿雲は、たぶん、わたしが悪をなしていないことだ。そんな気がするのだが。さて、『三十日』とはなんのことかな？』

ソクラテスは、そこで大きく息を吐き、「うむ」とぶあつくちびるを合わせ、やがて夢のことなど忘れたそぶりで、胸をそらした。

「さてと、みなさん、今日の法廷には、このボロボロのふだん着一枚で行くよ。立派な衣装で弁明すれば、真実が話せるとはかぎらない。言葉も身体もきれいに装い、自分のことばかり気にかけて、ああだの、こうだの、えー、ああー、うーと、ダラダラしたおしゃべりをしてても真実が見えないのだ。真実は短く、わかりやすく、着飾ることなく、裸の言葉

で告げられるのだ」。

ソクラテスのこんな皮肉ひにくの込められた弁舌べんぜつに、まわりのみんなが「アッハハ」と笑った。

「それじゃ、時間もたつぷりあることだから、みんなと話しながら、ゆっくり、裁判所に向かおう」。

「じゃ、出かけてくるよ」。

ソクラテスが妻クサンティッペと、三人の息子むすこに目をやると、クサンティッペは、背中になにか冷たいものを感じとった。

ソクラテスが歩きはじめると、十数人の仲間があとにつづく、若いプラトンが足早に先頭に立ち、クリトンはソクラテスのすぐわきを歩いた。プラタナスの樹きがならぶ大通りに出ると、足音に驚いた鳩わしの群れが、日が昇り輝かがやきはじめて空に舞まった。

「さあ、今日は何について、話そうか」。

ソクラテスの無邪気むじゃきな言葉に、クリトンはがまんできず

「何についてなんて、そんなのきな気分によくなれますね。あなたは、今日の午後には、死刑の判決を受けるかもしれないのです。だから、今日ばかりは、本気になってくださいよ。真剣に裁判のことだけ考えてください。裁判にのぞむ作戦、告発に対して、どのように反論なさるおつもりなのですか」。

だが、ソクラテスは、オホホ、と小声で笑う。

「ねえ、クリトン君。そんなこと、相手の言い分を聞かないと、いまから、どうのこうのと言ったところではじまらないよ」。

「そうだ、君は、わたしが死刑の判決をうけるかも、と言ったね。ちよūdい、わたしが『死』について考えていることを話そうか。ほんとうに死刑になったら、もう、みんなと話すことはできないのだから。どうだろう、聞いてほしいのだがね」

「いや、縁起でもない。今日は、死について話すのだけは、やめてください。さきほどの、夢の話だって、いやな気分になったのだから」。

クリトンが、真剣な目つきでことわった。すると、若いプラトンが、前方から言った。

「私はぜひその話が聞いてみたい。そんな話が聞けるチャンスは、めったにありませんから。みなさん、どうでしょう」。

みんなは、年長のクリトンに気がねしたのか、口をとじたままだった。ソクラテスもしばらく、だまって歩いていたが、前を歩く仲間目目をやりながら、心を決めたように

「やつぱり、話しておこう。今日にも、わたしの死刑がきまつて、みんなが、泣き叫ばないようにね。」

人間だれもが、肉体という独房どくぼうにつながれた死刑囚しけいしゅうなのだ。だから、看守に呼び出され死刑台しけいだいに立つ日が確実にやってくる。生きていることは、死につつあること。死はだれにも、一歩一歩、一秒一秒、コトコト、カチカチと、近づいているのだ」。

ソクラテスは、死についてこんなふう語りはじめた。だがクリトンは、耳をかす気にはなれない。彼は手をのぼして道ばたのオリーブの葉をもぎ取ると、それを前歯で噛かみながら足をはこぶ。

どうして、ソクラテスは、法廷ほうていに引き出されるのか？ 火のないところに、煙けむりは立たない。だとすると、ソクラテスにも、裁判所さいばんしょに訴えられるそれなりの弱みがあるのだ。それはいったい何なのか？

その時、ふと、クリトンの頭に、アルキビアデスとクリティアスの顔が浮かんだ。この二人は、ソクラテスと長年親しくつきあい、たつぷり指導してもらっていた。

だのにだ！ アルキビアデスは、ペロポネソス戦争のさなか、將軍として活躍したが、無鉄砲なシチリア島への遠征を呼びかけ失敗すると、途中で祖国をうらざり、作戦を敵国スパルタに漏らした。このうらざりが敗北の原因となったのだ。あの野郎ほど恐ろしい裏切り者はいない。

また、クリティアスは、戦後、短い期間とはいえ、無実の人を多数殺害、数千人を国外に追放、その財産を没収するなど、まさに残酷な恐怖政治を行った。だが、平和な政治が復活すると、アルキビアデスとクリティアスは一族とともに殺害された。二人はすでにこの世にはいない。

だのにどうだ！ この二人を教育したソクラテスは、しゃあしやあと生き残り「正義とは、善とは、徳とは何か」と、こりることなく、えらそうなことを、いまでも若者をつかまえて教えているではないか。こんなことが、ゆるされるのか。民主派のリーダーたちは、アルキビアデスとクリティアスの師であったソクラテスを見せしめに裁判所に突き出したのだ。

「きつとそうだ。そうに、きまつている」

とクリトンはつぶやいた。ふと気がつくところ、死シについての話は終わり、みんなが、だまつて裁判所へともくもくと歩く。

ソクラテスは、これから、どのように告発者に反論するのか？ 裁判所を目の前にして、クリトンは、ソクラテスの深い知恵ちえを信じるほかなかつた。

みんなが祈いのる思いで裁判所の階段をのぼると、法廷ほうていからざわめきが漏もれ出ていた。ソクラテスが裁かれるというニュースは町中に知れわたり、いままでになく、多くの人が裁判を傍聴ぼうちやうしようと、朝早くから裁判所につめかけていたのだ。

早朝のくじ引きで、裁判長一名と、五百名の裁判員が選ばれていた。彼らかれが今日、ソクラテスを裁く。

おわりに

みなさんには、たぶんこんな疑問が残るかもしれません。それは、「知識があっても、知恵がなければ、より善く生きられない」。このことは、なるほどと思える。だけでも、いまひとつ「知恵」と「知識」のちがいが、わからない……と。

それならば、「知識」は、頭に蓄えられたもの、「知恵」は、どのように知識を使うかを決めるもの。ストック（蓄え）とフロー（流れ）の関係で考えてみると、ふたつのちがいがよくわかってくるのではないのでしょうか。

知識を分野別に「体系化」したものを科学と呼ぶなら、近代から現在にかけて、もっとも力をつけたのが、自然を支配するとの意味で名付けられた「自然科学」です。なるほど、医学の進歩はすばらしく、不治の病とされていた癌も、だんだん治る病になりつつあります。

だけでも、幸福のために科学の進歩を追いかけたはずなのに、われわれは今、原子力の脅威に恐れおののいています。そして、この問題に決着はつくのでしょうか？ だれがつけるのでしょうか？ 科学者や政治家の知恵だけでなく、人間の知恵が試されているのです。

はたして、ソクラテスの「無知の知」の警告は、われわれにとどいているのでしょうか？

二冊の古典を料理したら、いつのまにか「私のソクラテス物語」になっていました。この本を読み、さらにソクラテスに興味があれば、次は原作に手を伸ばしていただきたい。

この本を、読者のみなさんと、どう閉じようか。

人の生き方も、国の在り方も

学問以前の^{ちえ}知恵^ぐでまゐる。

なお、最後にこの本を完成するにあたっては、多くの方からアドバイスや励ましの言葉をいただきました。厚くお礼申しあげます。

また、私の授業を熱心に聞いてくださった卒業生のみなさんがいなければ、このような本は出なかつたろうことも、感謝の気持ちを込めて申し添えます。くわえて編集の労を取っていただいたせせらぎ出版のみな様にお礼を申し述べます。

参考文献

- 『ソクラテスの弁明・クリトン』プラトン著 久保勉・訳（岩波 ほるぷ文庫）
- 『ソクラテスの弁明・クリトン』プラトン著 山本光雄・訳（角川文庫）
- 『ソクラテスの弁明』プラトン著 戸塚七朗・訳（旺文社文庫）
- 『ソクラテスの弁明・クリトン』プラトン著 三嶋輝夫・田中享英・訳（講談社学術文庫）
- 『プラトン全集 I』田中美知太郎・訳（岩波書店）
- 『哲学者の笑い』山本光雄著（角川新書）
- 『ソクラテスの死』山本光雄著（角川新書）
- 『ソクラテス』上・下 村井実著（講談社）
- 『ソクラテスの生き方』白石浩一著（社会思想社）
- 『ソクラテス』中野幸次著（清水書院）
- 『ソクラテス最後の十三日』森本哲郎著（PHP研究所）
- 『ソクラテスの最後の晩餐』塚田孝雄著（筑摩書房）
- 『ソクラテスの死』R・グアルデーニ著 山村直資翻・訳（法政大学出版局）

料理人 プロフィール

新國 にいくに
としお 稔秋

昭和十七年 京都府舞鶴市生まれ

昭和三十六年 京都府立東舞鶴高等学校卒

昭和四十年 國學院大學文学部哲学科卒

東京の私学 自由ヶ丘学園高等学校に勤務

その間、夜に立正大学で英文やインド哲学を学ぶ

昭和四十二年 同校二部英文卒

その後、郷里に帰り、京都府立網野・峰山・宮津・南陽・西城陽高等学校など、各校に勤務。その間、ソクラテスに自分を重ねながら、倫理や世界史を担当（私は教科書を美味しく食べやすくして生徒に伝える言葉の料理人だった）

●装幀——上野かおる

これならわかる ソクラテスの言葉
- 『ソクラテスの弁明』『クリトン』超現代語訳-

2013年5月25日 第1刷発行

原 作 プラトン

現代語訳 新國稔秧

発 行 者 山崎亮一

発 行 所 せせらぎ出版

〒530-0043 大阪府北区天満 2-1-19 高島ビル 2階

TEL. 06-6357-6916 FAX. 06-6357-9279

郵便振替 00950-7-319527

印刷・製本所 株式会社遊文舎

©2013 ISBN978-4-88416-222-1

せせらぎ出版ホームページ <http://www.seseragi-s.com>

メール info@seseragi-s.com



9784884162221



1920098012008

ISBN978-4-88416-222-1

C0098 ¥1200E

定価(本体1,200円+税)

これならわかる
ソクラテスの
言葉

お品書き

ソクラテスの弁明

- 一、裁かれる日の朝
- 一、法廷に響くみことな言葉
- 一、真実は語られていない
- 一、悪意に満ちた、うわさ
- 一、神託の謎とき
- 一、メレトス答えよ!
- 一、ソクラテスはかく語る
- 一、吾輩は奴である
- 一、神霊の音が聞こえる
- 一、権力から遠く離れて
- 一、いつまでも考えてください
- 一、教えたことは一度もない
- 一、うその正体を明かそう
- 一、裁きは静かに待つべきだ
- 一、最初の裁き
- 一、ご褒美をください
- 一、死刑がきまった
- 一、あなた方こそ裁判員
- 一、運命の日に祭礼が始まった
- 一、裁きの終わった夜

クリトン

一、君と僕の獄中対話

クリトン